自主創造
日本大学

CST
Nihon University, College of Science and Technology.

理工研 News

NO.56
Vol.19 2008/1
日本大学理工学部

目　次

脱窒能力を有するリン蓄積細菌の探索と低環境負荷型新規栄養塩除去プロセスの開発 2
フェムト秒レーザによる超高速スピン制御とダイナミクス計測 3
「e-Learningを使った外国語学習支援システムの構築」について 4
研究施設　交通総合試験路 5
研究施設　テクノプレース15 土木工学科棟 6
校友の匠 8
科学のちから 9
サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）を通じた中高大連携教育 10
海外学術交流 11
学術講演会　スペシャルセッション 12
第30回理工学部学会・協会賞受賞者一覧 14
TOPICS & NEWS 15
駿博会ニュース 16
編集後記

変わっていいことと変わってはいけないこと
ーでんでんむしのかなしみー

理工学研究所長
電子情報工学科教授　伊藤彰義

20年前頃の小学校の教科書に出ていた童話「ごんぎつね」の作者の新見南吉の童話に「でんでんむしのかなしみ」がある。あるでんでん虫が、自分の殻のなかには大きな苦悩が詰まっていると気づき、仲間のでんでん虫に尋ねてまわるが、だれもが同じ悩みを持つことを知り、その後悩みを口にすることを止めたとの話である。

このごろの学生諸君は、積極性に欠け、夢を持たず、意欲がないと多くの教員が感じ、でんでん虫の殻のごとく色々な場面で嘆かれる。嘆いていても、何も始まらない。入学してくる若者達の年代はいつの時代も同じ、潜在能力に大きな差が有るはずはない。その能力を引き出すのに必要な工夫が時代とともに大きく変化している事に気づけば、背負った殻も軽く感じられる。年寄りの成功体験の押しつけだけでは通らない、やり方は変えねばならない。体験学習、高大連携、入学前教育、初年時教育、学生支援、特色ある教育、現代的ニーズ教育、インターンシップなど世間の大学への要求は目白押し。これらに見られるように、あの手この手が必要なことは理解しても、それに疲れを感じない訳でもない。

大学は学問の場、それを説き実践する姿勢は貫かねばならない。「研究を通じての教育」を実践するためには「丁寧な教育」が基本となる。現代にも通じる研究・教育の実践技術にも心と時間を注ぐことが、学生諸君を「歌を忘れたカナリヤ」にさせないために背負っていかねばならない、「でんでんむしの殻」。

「変わらなければいけないこと」と「変わってはいけないこと」を峻別し、教職員全員が「でんでんむしのかなしみ」を共有すれば、大学の未来は明るくなるであろう。

理工学部学術賞受賞記念講演要旨

脱窒能力を有するリン蓄積細菌の探索と低環境負荷型新規栄養塩除去プロセスの開発

土木工学科准教授　齋藤利晃

私の研究テーマは、脱窒性リン蓄積細菌を用いた新しい下水処理法の開発です。下水中には窒素やリンが含まれており、これらを除去することは富栄養化防止のために大変重要なことです。しかし、処理に伴うエネルギー消費や汚泥という固形廃棄物の発生を削減も同時に達成する必要があります。私が注目している脱窒性リン蓄積細菌は、一つの細菌グループで脱窒と脱リンを行うことができるため、これらの目的に叶った細菌グループと言えます。問題は、無数にいる細菌の中から目に見えず会話もできないその脱窒性リン蓄積細菌を、如何に優占的に増やすか、その方法がわからないことです。

集団の中からある特定の性質を引き出すには、その性質に磨きを掛けて競合相手との差を顕著にするか、自分を弱らせつつも競合相手をより弱体化させて相対的に自分を優位にする方法があります。私が取ったのは後者の方法で、『肉を切らせても骨を断つ』方法、より簡単に言えば安売り競争でライバル会社を撤退させ、その後に価格を上げていくようなやり方です。使用したのは亜硝酸という物質で、リン蓄積細菌に対して阻害性を有していますし、窒素の除去過程で出てくる物質ですから最適と言えます。また、デルフト工科大学滞在時に行った研究から、脱窒性リン蓄積細菌は亜硝酸の阻害を受けにくいのではないかという直感がありましたので、優占化因子として有効ではないかと考えました。ただし、当時のボスには否定されたので、実際に行ったのは帰国後です。

はじめに行ったことは、亜硝酸を投与して脱窒性リン蓄積細菌が優占化することを実証したことです。これは面白いように結果が出て、極微量の亜硝酸でも有効であることを示すことができました。次に行ったことは、何故優占化に効果を有するかを証明することです。考えたメカニズムは『肉を切らして骨を断つ』作戦ですから、証明すべきは、亜硝酸が好気的リン摂取を阻害するメカニズムを明らかにすること、および脱窒性リン蓄積細菌が阻害緩和能力を有するメカニズムを明らかにすることです。集積培養したリン蓄積細菌に好気条件下で亜硝酸を添加する実験を、有機物共存下非共存下で実施し、亜硝酸による好気的リン摂取阻害が呼吸阻害による間接阻害であること、脱窒能力を有するリン蓄積細菌ほど阻害を受けにくいことを示しました。さらに、リン蓄積細菌が亜硝酸を好気的に脱窒（図 -1左）することで、阻害効果を有する亜硝酸および亜硝酸の還元態である一酸化窒素を除去し、阻害を緩和できることを実験的に明らかにしました。

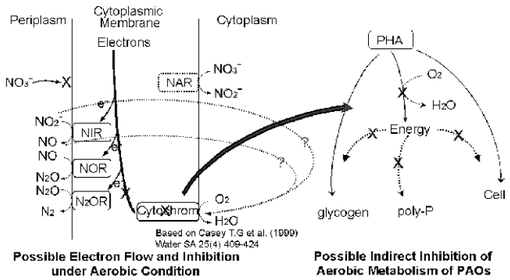


図 -1　亜硝酸による呼吸阻害と緩和の概念図

これらの成果は幾つかの論文としてまとめられ、実験と解析に携わった吉田君（現土木工学科助手）は環境工学研究奨励賞を受賞、高橋紘平君は水の専門会社であるオルガノ株式会社に入社。両君ともそれぞれに活躍をしています。また、本研究成果を活かした脱窒性リン蓄積細菌の優占化と遺伝子解析を用いた種の同定、新規プロセスの開発へと、現在、研究を深化させている状況です。

最後になりましたが、この度の学術賞受賞につきまして、赴任以来指導してくださった田中和博教授と松島眸教授、そして常に温かく支援をくださった竹澤三雄教授および教職員の方々、実際に成果を出してくれた吉田征史助手、高橋紘平君に深く感謝申し上げます。

フェムト秒レーザによる超高速スピン制御とダイナミクス計測

電子情報工学科専任講師　塚本　新

近年、大規模情報記録に関する研究分野において、最も重要な課題の一つとして記録スピードの高速化が挙げられます。ハードディスクに代表される磁気記録では、磁性記録媒体内の集団スピンである磁化の向きを磁界によりスイッチングすることで情報記録を行いますが、既に物理的に不可避な高速化の限界に迫り、根本的解決策がないまま模索が続いております。

このような背景の下、全く新しい原理である超短時間での光とスピンの直接作用により磁化の制御が可能であることを明らかにし、世界に先行し磁化スイッチングの実証実験に成功しております。具体的には、フェムト秒パルスレーザを光源とした円偏光を用い、GdFeCo薄膜に対しパルス長40 fs（フェムト秒：10^{-15} 秒）の単一パルス照射のみで完全磁化反転できることを実証実験しました（図１）。また、その光 スピン直接作用が光の進行方向へ磁界を加えたことと等価で、円偏光のヘリシティ（右回りあるいは左回り）の選択により制御可能であり、現象論的に逆ファラデー効果で説明できることを明らかにしております。これは、従来不可能だと考えられてきたもので、既存ハードディスクの約100,000倍という飛躍的超高速記録への路を切り開くものとして、世界中から注目されております。本年 7月にアメリカ物理学会 Physical Review Letters （Vol.99,047601-(pp.1-4)(2007))にて発表した最新の成果は、各種学会等にも記事として取り上げ挙げられております（Nature Photonics 1,494（2007）、ScienceNOW,28 June（2007）、Physics News Update,830 #1, June 27,(2007) 等）また、現在ポスト半導体デバイスとして、電子のスピン情報を利用したスピントロニクスデバイスの研究が活発に行われ、本研究が、次世代基本技術に向け非常に重要な意味を持つものとして、科学技術振興機構（JST）の「さきがけ」（戦略的創造研究推進事業）に採択されました。平成19年度1620件応募の中から、私立大学11件採択の一つです。

本研究は、高強度極短時間パルス光源（発光時間数十 fs～数百 fs）を利用することが特徴ですが、物質内での、電子・格子・磁気システム間でエネルギー伝達に要する時間（数百 fs～数百 ps程度）よりも短時間で物質の状態を観察、操作できる事を意味します。上記光による直接作用と共に、ポンプ・プローブ法と呼ばれるストロボスコピック計測を併用し、超短時間加熱・強電界を積極的に利用した超高速磁化反転手法の確立および、フェリ磁性体の有する磁化および角運動量補償点を利用した磁化動特性の制御を中心に研究を発展します。日常我々が知覚しうるサイズ・時間スケールとかけ離れた領域の世界を明らかにし、さらに我々の生活を変え得る可能性を見出すことがこの研究の面白さであり醍醐味です。

最後に、本学へ入学して以来、学位を得、本学教員となり今日に至るまで、理工学部の諸先生、職員の方々に育てて頂きましたことをこの場をお借りしお礼申し上げます。

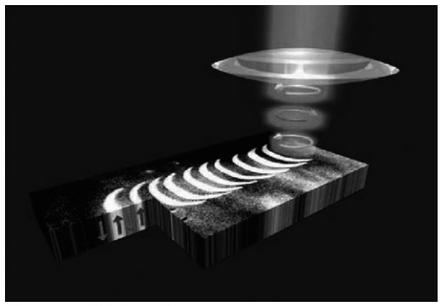


図１　光直接磁化反転結果

理工学部教育賞受賞記念講演要旨

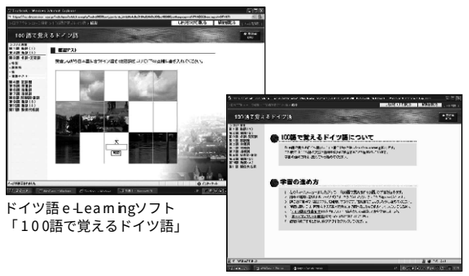
「e-Learningを使った外国語学習支援システムの構築」について

一般教育教室准教授　中川　浩（ドイツ語）
一般教育教室専任講師　郭　海燕（中国語）

「e-Learningを使った外国語学習支援システムの構築」という研究テーマで教育賞を受賞することができました。e-Learningに関してはすでに平成16年度に英語の谷岡教授をはじめとするe-Learning研究グループが研究に着手しており、研究グループに誘われる形でドイツ語、中国語もe-Learning研究に加わりました。語学の教員としてソフトウェアの技術的側面に関してはまったく不案内でしたが、幸いさまざまな方からご支援をいただきe-Learningソフトの作成に取り組むことができました。

ドイツ語のe-Learningソフトは、「100語で覚えるドイツ語」と名づけ、初級文法と基礎的語彙を不可分一体のものとして学習することをコア・コンセプトにしています。各課で扱う文法事項とそれに関連する基本語彙を取り上げ、両者を同時に学習するように構成しました。

ドイツ語の場合、その特殊文字をも含めてキーボードから入力することが容易なので、確認テストは語句をみずからタイプして入力する問題形式としました。e-Learningでよく見られる正解選択式の問題では、実際にはなかなか語彙の定着が見られないことから、あえてスペルを入力する形式としました。この形式では、その語形変化も含めて語彙を正確に習得しておかないと入力できないため、かなり難易度があがります。はじめてすぐの授業では、しばしば立ち往生してしまう学生が見られました。しかしそれだけに各自が集中した取り組みを行ったあと、通常の授業にはない達成感が得られたと述べる学生もいます。



ドイツ語e-Learningソフト
「100語で覚えるドイツ語」

中国語のe-Learningソフト「初級中国語講座」では、実用性と汎用性を考慮し中国語検定試験の準4級と4級の内容を反映させています。また取り上げる語彙や例文にはそれぞれ音声をつけ繰り返し発音を聞けるようにしてあります。全体の構成は発音ならびに初級、中級の文法を扱う教材部と語彙を取り上げ例文や関連する文法事項を説明する辞書部、そして検定試験対策用の模擬試験問題を収めた検定試験対策部からなっています。さらに中国文化や日中文化の相違などを紹介する豆知識集もつけ、語学学習だけでなく異文化理解にも役立つ内容にしました。

授業では通常の対面授業を行ったあとe-Learningを利用し、学習した内容を各自が確認し定着をはかる時間をもうけました。授業の終了後には、学習した内容を進んで教員に披露し、習得したばかりの会話が実際に成立する喜びを顔いっぱいに表す学生たちが見られます。

中国語e-Learningソフト
「初級中国語講座」

ドイツ語の場合でも中国語の場合でも、通常の語学授業のなかにe-Learningを取り入れると、各自がそれぞれの課題に取り組むことになるため、より積極的な授業参加が求められ、おのずと授業の質が変わっていきます。学習者にとっても、e-Learningは自分のペースで学習できる点や必要に応じて何度でも発音を繰り返し聞ける点、また授業以外でも好きな時に予習や復習に利用できる点など多くのメリットがあります。

現在ドイツ語も中国語もそれぞれ内容の改訂、充実をめざした作業に取り掛かっており、来年度からは広く理工学部全体で利用できる態勢を整えようと準備しています。

研究施設

交通総合試験路

精密機械工学科教授　青木義男

交通総合試験路は、1972年に理工学研究所の所管として理工学部船橋キャンパス（当時は習志野キャンパス）北側に建設された、幅員30m、全長618mの多目的試験路である。世界的にもユニークな大学付属の総合的な試験路として、35年に渡り学部内にとどまらず、生産工学部や他大学、企業の研究・教育に活用されてきた。研究利用としては、人力飛行機の飛行試験、ドライバーの運転疲労および運転心理試験、自動車や二輪車の操縦特性試験、車両の運転特性、ドライバーの運転疲労、路面とタイヤとの騒音調査、電磁波反射特性試験など多岐に渡り、機械工学、人間工学、交通工学、通信工学などの様々な分野の調査・実験に利用されてきた。また教育面では、学生フォーミュラカーやEvエコランカーの走行試験、グライダー滑空実験、大学、付属高校の体育授業、建設系学科の測量実習をはじめ、クラブ活動、理工学部の行事、近隣消防署の訓練などに多方面で活用されている。一方、本施設は船橋日大前駅から教室棟や、付属日本大学習志野高等学校、千葉日本大学第一小・中・高等学校への通学路として、大学生を始め、小中高生の歩行者通路の役割も担っている。このように試験路としての研究施設である一方、その一部は通学路や車両通行の共用道路として利用されている重要な施設である。

交通総合試験路は長きに渡り理工学部の代表的な研究設備として活用され、特に平成16年度以降は学内外の双方の利用申請が増加してきたが、1972年の建設当初に多くの舗装工学に関する調査研究に供された経緯があるため、試験路の各所で舗装構造（排水性舗装を含む）や表層仕上げが異なっていた。さらに、近年それらの舗装表面の劣化（表面骨材のはく離と飛散）が顕著になり、車両の走行試験などに支障をきたし始めていた。そこで平成19年8月に施設全面の舗装表面を切削して剥離などを起こした表層部分を除去し、新たな表層を構築するオーバーレイ補修工事を行い、試験路表層を均一な密粒度アスファルトコンクリート（一部横断歩道部分は透水性舗装）で舗装改修した。図1は舗装改修後の交通総合試験路全容であるが、舗装表面は新設舗装とほぼ同等の機能に復活し、試験路利用者をはじめ、船橋日大前からキャンパスに向かう試験路横断者に対して快適な舗装表面を提供可能となった。また、舗装改修の際には、縦断方向（長手方向）全長618mにわたって水平を確保し、より理想的な条件での車両走行試験の実施を可能とした。さらに年度内には、試験路に進入・横断する人々や車両に対して試験路が実験使用中である旨を警告する電光掲示板式警告表示システムを導入する予定である。設置箇所は交通総合試験路への進入口（4号館裏手駐車場と13号館の間）および試験路東側進入口の試験路進入ならびに、船橋日大前駅からの横断歩道アプローチ付近に1カ所の3カ所を予定している。

本年度の改修工事と平成16年度に構築されたインターネットによる利用申込みシステムによってハードとソフト両面での機能性・利便性の向上が図れ、より理想的な路面条件での走行実験が可能になった。試験路改修後の9月以降に行なわれたグライダー滑空実験（図2）ならびにEvエコランのエキジビション競技会（図3）の操縦者には、路面性状の改修効果を実感していただき、利用後のご意見から当初計画通りの改修が成し遂げられたと感じた。この改修工事が完成するのは電光掲示板システムが設置される年度末であるが、10月以降、他学部や外部企業からの利用申込みを含め使用頻度が高くなってきており、利用率の更なる向上が見込まれる。他大学には見られない実験施設「交通総合試験路」をご活用いただき、内外にご周知いただければ幸いである。

図2　グライダー滑空実験

図1　舗装改修後の交通総合試験路全容

図3　Evエコランエキジビション競技会

研究施設

テクノプレース 15　土木工学科棟

土木工学科教授　安田陽一

土木工学科（Department of Civil Engineering）の専門の一つに水理学（Hydraulics）という学問があります。水理学は、主に水の流れを対象に、計画・設計が可能となるように、理論・実験によって流れの現象を解明し、普遍性を見出したことを学問体系化したものであります。実験によって流れの現象を解明し、普遍性を見出すために、土木工学の分野では水理実験室があります。

土木工学科に在籍する学生以外の在学生や高校生以下の生徒さんにとって土木工学科で水の流れの現象を解明し、水の流れについて教育しているイメージはあまりないようです。ましては、川に生息する水生生物の生態系保全に貢献する流れの研究をしていることも想像していないようです。

船橋校舎のテクノプレイスにある環境水理実験室は14号館の建設に伴い、旧総合水槽棟および5号館地下1階から移動した水理実験施設です。この施設での実験は授業科目としての実験（1，3年生向けのゼミナール、3，4年生向けの水理実験など）、現象解明を行うための実験（卒業研究、修士・博士論文作成のための研究を主体とした実験）があります。研究テーマとしては、基礎研究から応用研究に至るまで幅広いテーマを取り扱っています。

実験室の中には、主たる水路（水路幅、水路長が異なる可変勾配型水路）が3箇所、階段状の水路（総落差約3m）が2箇所、魚道の模型水路（実規模の3分の1を想定）が1箇所設置されています。水路の下には水を貯める低水槽があり、湛水された水を実験室の前方に設置されているポンプで汲み上げています。汲み上げた水は高水槽に流入され、安定した水量が各水路に供給できるように整えて水路に流れる仕組みになっています。すなわち、循環式の装置となっています。

大津教授を始めとする水理系研究室の特徴は局所的に流れが大きく変化する現象（この現象を局所流と呼びます）を対象に系統的に解明する研究を勢力的に実施していることです。そのため、種々の局所流について研究が可能なように実験装置を工夫しています。本研究室の研究努力が実り、1800年代から設立された伝統のあるアメリカ土木学会（ASCE）から最高論文賞（2000年）、最高討議論文賞（2005年）を受賞しました。なお、国外でも両者を受賞した例は3件程度しかありません。また、国内では他に例はありません。

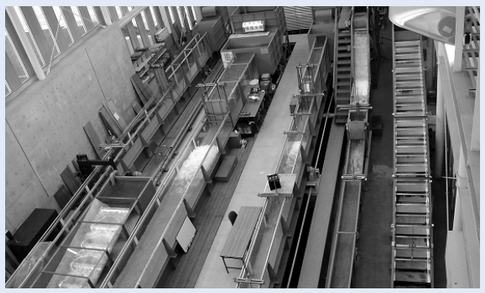


写真1　環境水理実験室の全体写真　a）上から撮影した写真

b）後方から撮影した写真

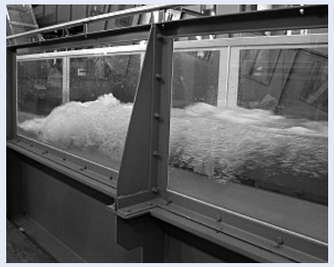


写真2　跳水現象

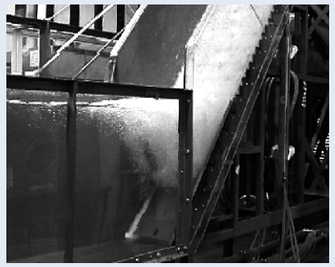


写真3　気泡混入した高速流の制御

写真4　段落部での流れ、階段状水路の流れ

写真5　プール式台形断面魚道

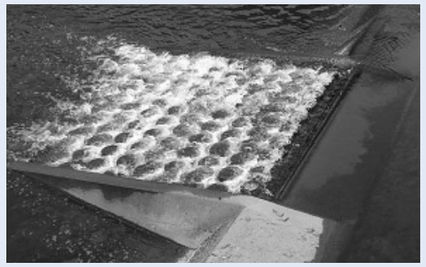


写真6　円柱型ブロック式魚道

写真5，6に示す魚道は本研究室で独自に提案した魚道であり、左側の写真が魚道模型で、右側の写真が実用化された魚道です。

テクノプレイス環境水理実験室で行われている局所流の一例を写真2から写真6に示します。写真からみても分かりますように、局所流は水ばかりでなく気泡が混入した流れとなることがあります。そのため、現象解明するための工夫が必要不可欠となります。

本研究室では気泡混入の影響が局所流にどのように影響するのかについても解明を進めています。そのためにも、原型と模型との力学的な相似性を考慮し、模型規模が小さく粘性の影響が大きくならないように実験を行っています。

最近では、国内外ともに数値解析的に流れの現象を検討する研究が多く、実験的に検討する研究が少なく現象を直視する機会が少なくなっています。このため、現象を見る洞察力・現象を的確に伝える描写力・現象解明の発想力が低下しているように思われます。また、現象の実態を把握せず、観念的に現象の解釈を加える傾向があるようにも感じています。

現象解明にあたって重要なことは現象を的確に、かつ忠実に知ることから始まるものと考えています。幸いにも水の流れの現象は目視することも、手に触れることも、また耳で流れの音を聞くこともできます。在学生にはできる限り流れの現象を目で見て、手に触れて、耳で音を捉える機会を自ら見つけ、洞察力・描写力・発想力を身に付ける努力を惜しむことなく実行してもらいたいと感じています。環境水理実験室ではそれらを創出するきっかけづくりにこれからも貢献できように環境整備していきたいと考えています。

校友の匠 TAKUMI No.7

舞台は世界

トレック・ジャパン（株）代表取締役社長
上原利夫
（電気工学科　昭和５３年卒業）

Trek, Incの本拠地は米国ニューヨーク州メダイナにあります。有名なナイアガラ瀑布近傍の田舎町です。Trekの主力製品の一つは“Electrostatic voltmeter”、直訳すれば「静電電圧計」ですが、日本では「表面電位計」と呼ばれています。この製品の主たる顧客は複写機メーカーです。複写機、或いはレーザープリンタ等で代表される、いわゆる電子写真装置には感光ドラムと呼ばれる光半導体層を持つドラム状の部品があります。この感光ドラムを暗部に配置しコロナ放電等で均一な電位を光半導体表面に印加します。反射光やレーザー光で表面電位を露光して静電気像（静電潜像）を形成します。感光ドラム上の表面電位を測定することは電子写真では極めて重要な測定です。Trekの創業者で、全製品の基礎設計を手がけたBruce Williamsを日本に招聘し、彼が製品の説明をして私が通訳をするという営業行脚を各複写機メーカーで行いましたところ、製品は素晴しく良く売れました。現在Trekの表面電位計は世界中の電子写真装置メーカー及び研究機関で、電子写真の研究開発から製造まで広く使用され、表面電位計では世界で最も有名なブランドに成長しました。更に半導体デバイス、液晶パネル等に発生する静電気障害（ESD）を防ぐ為にも幅広く使われています。

大学時代の恩師は理工学部電気工学科教授川西健次先生でした。先生は私が在学中電磁気学の講義をご担当されておられました。表面電位計の原理を理解するには電磁気学の知識と教科書は本当に役に立ちました。電荷量が非常に小さい静電電位測定ですから、測定は非接触方式で行われます。Trekの表面電位計は、非接触測定にも拘らず電位分解能１mVで計測できる製品もあります。理工学研究所長であられる伊藤先生と理工学部電子情報工学科教授中川先生の研究室との共同研究で10mφ程度の高空間分解能を有する表面電位測定装置の開発を行っています。この装置が完成すれば、今まで測定できなかった微小領域の表面電位測定が可能となり、電子写真だけでなく多くの新しい分野への応用が期待できます。

1987年にTrekの日本法人トレック・ジャパンが緑屋電気との合弁会社として発足しました。これをきっかけにトレック・ジャパンに移籍しました。この頃から高圧オペアンプの売り上げが伸びてきました。電子写真装置では直流または交直両用高圧電源を多用します。Trekは一般的には電子部品の一つであるオペアンプを大規模化した四象限高圧オペアンプを電子写真向けに販売していますが、この高圧オペアンプは、実は半導体製造装置であるイオン注入装置のイオンビーム静電スキャンアンプに最適なことが実証されました。現在世界中で使用されているイオン注入装置にはTrekの高圧オペアンプが広く使われています。また半導体ウェハーを静電気で吸着する静電チャック用電源としてもTrekの高圧オペアンプが数多く使われています。高圧オペアンプの応用は実に幅広く、以上の他にも核融合、大気圧プラズマ、ピエゾアクチュエータ駆動等々様々な分野にどんどん使われています。

私は子供の頃から英語に興味をもち、在学中はESS（English Speaking Society）で活動していました。電子工学の専門知識と英語を自由に駆使できることは私にとって大きなメリットです。2006年にTrek, Incとトレック・ジャパン両社を買収し、TrekのCEOに就任しました。現在は世界中を飛び回り、各国の研究員と意見を交換し、様々な最先端研究に自社製品で貢献できることを大いに誇りに思っております。

Model347　0 to±3kV
表面電位計

Model30/20A　±30kV,±20mA
四象限高圧オペアンプ

Relay Interview
科学のちから No.7

“海洋都市”への夢は、海への憧れから始まった。

株式会社三井造船昭島研究所
技術統括部ＮＧＨ技術部輸送船技術室室長
工学博士　宮島省吾
（理工学研究科博士後期課程海洋建築工学専攻 昭和６２年修了）

海のない県・長野県で育ち、１９７０年の大阪万博で目にした小型の水槽の中で作動していた「波力発電装置」の模型に感動し、人一倍強く海への憧れを抱いていた宮島さんは、１９７８年、新設されたばかりの日本大学理工学部海洋建築工学科に入学。大学院理工学研究科海洋建築工学専では「波力発電」をテーマに研究を続け、東京大学の助手、講師を経て、現在の三井造船昭島研究所に入社しました。

入社以後、メガフロートの実現に関する研究、浮体式洋上風力発電の実現に向けた研究、ＮＧＨを用いた新しいメタンガスの輸送システムに関する研究などに取り組み、子どもの頃からの憧れでもあった“海洋都市の実現”への夢をたずさえながら、研究・開発に勤しんでいます。

実験や実習で ほんものの海を知る。

―― 研究で実際に身についたことは？

卒研から博士論文まで、私は「波力発電」をテーマに研究を続けてきました。学部時代は、恩師である増田教授が講師になられた最初の卒研生であったため、あたたかくも厳しく指導していただきました。たとえば、軽井沢の夏合宿でも夜中に英論文の輪講をやったことがありましたね。

専門研究については、卒研、修論、博論と、1年中実験に明け暮れていました。

当時は波力発電研究が最盛期で、大学院では東大の船舶工学科や生産技術研究所といった日本大学以外の先生方から指導を受ける機会があり、非常に刺激的な研究生活を送ることができ、さまざまな実機プロジェクトにも参加させていただきました。そこで実際の海での実験や、コンクリートケーソンを砕いてしまうような波の威力を目の当たりにすることができたのは、研究を進める上で非常に役に立ちましたね。

また、波力発電の研究を通じて出会うことができた研究者の方々とは、今も海洋エネルギー実現の夢を追っております。

―― 今の仕事に役立っていることは？

学生時代に学んだこと全般が役に立っていますが、特に、実験を通じて、物理現象を目で見て把握するという経験が積めたことが、今の仕事のベースとなっています。現在はコンピュータを駆使したバーチャルリアリティが盛んな時代ですが、私たちの仕事では現場（海）を知る、自然を体験する、つまり相手を熟知して研究を進めることが必要不可欠だということを痛感することがしばしばあります。

実業の世界では「工学的判断（性能、安全性、コストのバランス）」が求められますが、これらは理論計算だけに偏っていてはなかなか難しいと思います。『実際の波の中ではこういう動きをする』ということを肌身で理解することがとても大切ですね。

海洋構造物の研究を継続するため、企業へ就職。

―― 三井造船昭島研究所への就職は？

私は一研究者として、海洋エネルギー開発や、生活の場として海洋空間を利用するための研究を続けたかったので、大学院修了後、大学院時代にお世話になった東京大学生産技術研究所の前田教授の下で助手になりました。そこで海洋構造物の運動や海洋深層水利用の研究、メガフロート（超大型浮体式海洋構造物）の研究を進めていましたが、前田教授の定年退官に伴い、海洋構造物の研究を継続することができる現在の会社に就職しました。

これも先ほどふれた波力発電の研究を通じて出会った、貴重な人脈の賜物だと思っています。

海洋空間の 果てしない可能性を追究。

【メガフロートの実現に関する研究】

全長１kmの浮体を実際に建造し、小型飛行機による離着陸実験を行い、浮体式海上空港としての利用可能性を示すことができました。造船業界が結集して提案した羽田空港再拡張滑走路向け浮体は、実績がないとの理由で採用されませんでしたが、メガフロート工法の技術力を示すことができました。

【浮体式洋上風力発電の実現に向けた研究】

セーリング式風力発電浮体の操帆性能や安全性向上に関する研究を実施中。日本の風力発電を洋上に展開することができれば、現在の陸上風力発電の倍以上のエネルギーを洋上風力発電から得ることができます。

【ＮＧＨ（Natural Gas Hydrate）を用いた新しいメタンガスの輸送システムに関する研究】

採掘したメタンガスをＮＧＨという凍った固体状態にして輸送する技術の開発で、ＬＮＧより少ないエネルギーでメタンガスの輸送が可能になります。

現業にいる工学者の立場から 海洋都市を実現したい！

―― これからの夢は？

まずＮＧＨを輸送する船の開発を続け、実現化にこぎつけたいですね。また、メガフロートの実現も引き続きめざしたいと思っています。いずれも、環境問題や社会的課題の解決に向けても貢献できる研究であり、やりがいのある仕事です。

さらに海洋基本法の発効に伴い、海洋国ニッポンを内外にアピールできるような研究・開発にも取り組んでいきたいですね。海洋エネルギーなどもそのひとつですが、現業にいる工学者としての立場から、実現性の高い提案をしていきたいと思っています。

またこれは私自身の大きな夢でもあるのですが、海の上に都市を浮かべる、つまり“海洋都市の実現”をめざして研究・開発を続け、その一端に携われるポジションにいたいと願っています。

サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）を通じた中高大連携教育

精密機械工学科教授　青木義男

「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」（SPP）は、文部科学省の「次代を担う人材への理数教育の拡充」施策の一環として、学校と大学・科学館等の連携により、児童生徒の科学技術、理科・数学に関する興味・関心と知的探究心等を育成することを目的とする事業である。平成14年度から文部科学省で実施してきた「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業」の調査研究の成果を踏まえ、平成18年度より、独立行政法人科学技術振興機構において実施している。

日本大学理工学部では、平成18年度より物理学科が付属高校や埼玉県立高校と連携して開始されたSPPは、主として高校１年生、２年生を対象として行われ、物理授業や実験を補うものと位置づけられていた。平成19年度には、精密機械工学科も付属高校とのSPPを開始し、千葉日本大学第一高等学校１年、２年対象の講座型学習活動を精密機械工学科が、同中学校３年対象の講座型学習活動を物理学科が分担して行うかたちで実施された。

物理学科が行なった中学３年生対象の講座型学習活動は、物理学への興味を喚起するための簡単な実験を伴い、様々な視点から物理学を学ぼうとする講座であった。６月に行なわれた各講座の内容は、第１回「ふしぎな光，電気と光」、第２回「プラズマ」、第３回「光と物理研究（実験）」、第４回「天文学」、第５回「科学技術の進歩と人間」であった。これらの詳細については、千葉日本大学第一中学・高等学校のウェブページ　http://www.chibanichied.jp/index.html で確認できる。

一方、精密機械工学科では、高校１年生、２年生を対象とし、高校の数学・物理を基礎に、大学で学ぶ工学への応用へつなげられる簡単な電気機械の動作原理と製作ならびに性能試験を兼ねた競技会の実施を全体プログラムとする３回の講座と学園祭での競技会イベントを行なった。７月から11月に渡って行なわれた各講座の内容は、第１回「特殊環境で働くロボットの概要説明と光センサロボットの仕組み」、第２回「光センサロボットの製作とプログラミング概要」（図１）、第３回「飛行ロボットモデルの原理と製作」であったが、９月初旬までに製作した光センサロボットの公開競技の場として、９月22日と23日の両日に行なわれた千葉日大一高学園祭を選んだ。学園祭は生徒達の課外活動の日頃の成果を公表する場でもあり、全校の先生方はもとより、多くのご父母の皆様にもSPPに参加した生徒たちの成果を見ていただくことが、生徒達のモチベーションを高める良い機会と考えたからである。高校の先生方にも会場設営や事前周知などで多大なご協力をいただき、学園祭期間中には、SPPに参加する43名の生徒がそれぞれに、光センサや接触センサと駆動機構の細かな調整を行った上で、試行錯誤したプログラミングを駆使して難易度の高いコースの走破に挑戦した。学園祭の期間に何度でも挑戦できる競技方式が功を奏し、最終的には20名近くの生徒が参加し、黒板に貼り出した競技結果に一喜一憂して大いに盛り上がった。

図１　SPP光センサロボット製作とプログラミング講座

日本大学理工学部と付属高校の連携による競技会と研究展示ということで、興味をもって見学に来られたご父母も多く、同会場に展示したレスキューロボットにも、大いに興味をもっていただき、展示説明を担当した卒研生や千葉日大一高OBは大忙しであった（図２）。学園祭の最後には、光センサロボット競技会の表彰式を行ない成績優秀者に賞状・賞品を授与し、好評のうちに幕を閉じた。11月に全３回の講座が終了したが、いずれの講座も生徒には好評であり、高校の先生方のご意見を伺った上で、平成20年度も継続して行っていく計画である。

図２　千葉日本大学第一高等学校学園祭での光センサロボット競技会

海外学術交流

My academically exciting stay at CST

Andrei Kirilyuk, Associate Professor
Institute for Molecules and Materials, Radboud University Nijmegen,
Toernooiveld 1, 6525 ED Nijmegen, The Netherlands

The starting point of my interactions with the College of Science and Technology of Nihon University was several years ago, when Dr. Arata Tsukamoto first braved all barriers and came to Nijmegen, The Netherlands. His goal then was to learn the use of femtosecond lasers in various experiments on magnetic materials. What he actually achieved was to contaminate everyone in our group including myself with interest to the magneto-optical recording materials, to the (rather unusual) Japanese style of work, and to the Japanese culture and Japan in general.

Therefore, when in January 2007 I heard from Prof. Akiyoshi Itoh about a possibility to visit the College of Science and Technology for a period of several weeks, no doubts were possible: this is my chance to see for myself, how those magneto-optical media samples are manufactured, in what ways they are characterized, what should be done if one wants to make nanostructures out of them, and how all of this is covered by that specific work environment that was puzzling us years ago.

The grant from "Visiting Foreign Fellowship Program 2007" of CST, Nihon University was duly applied for and finally allowed me to realize this chance.

Very thin (typically 20 nm, a thousand times thinner than a human hair) magnetic films made of rare-earth — transition metal alloys, are rather unique materials. Along with their very large magneto-optical coefficients, they possess the widest possible range of magnetic anisotropies and ferrimagnetic compensation temperatures. Our joint research on the ultrafast magnetization dynamics in these materials lead to a number of significant discoveries and resulted in a publication, in 2007 alone, of three papers in Physical Review Letters, the flagship of physics journals.

It has been shown that the ferrimagnetic compensation temperature is a point where the dynamics accelerates, this fast behavior being combined with the strong damping, making this point an ideal condition for magnetic recording [Phys. Rev. B 73, 220402 (2006)]. Moreover, due to the large spin-orbit coupling introduced by the rare-earth component, the magnetic order is directly affected by the electromagnetic field of light [Phys. Rev. Lett. 98, 207401 (2007)], leading to a world-record in the speed of magnetization reversal, in an all-optical magnetic recording scheme [Phys. Rev. Lett. 99, 047601 (2007)]. This last discovery caused a lot of stir in scientific community; in a Daily News article of Science Magazine (June 28, 2007) it has been even suggested that: "In the race to make computers more powerful, magnets may be out and lasers may be in."

My contacts here with people who actually work on the optimization of such materials were invaluable for my understanding of the background physics. In particular, this refers to the practical work with Dr. A. Tsukamoto and his students on film deposition and nanostructuring in Advanced Materials Science Center of CST.

I thoroughly enjoyed several lectures that I have given to the students of both Funabashi and Surugadai campuses, in particular all the questions that I've had to answer. After-talk discussions with Prof. A. Itoh, Prof. K. Nakagawa, Prof. S. Inoue, helped me to better understand the significance of research we are carrying together, as well as to learn the ways of understandable presentation of even most complicated scientific results. The latter is particularly true as far as my lecture for students is concerned, dealing with experimental methods in ultrafast magnetization dynamics.

Unfortunately, even the best things eventually come to an end, and so did my 20-days stay at CST. Nevertheless, as any ending means a new start, so does our collaboration with the Department of Electronics and Computer Science of CST. I am leaving Japan full of new ideas, as well as with a box of freshly made samples, eager to stick them into the experimental setup in Nijmegen and see what new physics may emerge. The collaboration with my Japanese colleagues and friends will go on!

Andrei Kirilyuk（アンドレイ キリリューク）
オランダ国ラダバウト大学助教授。光による直接超高速スピン制御に関して、電子情報工学科伊藤彰義教授らと共同研究を実施するため、理工学部海外招へい研究員として平成19年10月22日より20日間滞在。
高密度記録媒体作成・評価、ナノ加工実験の他、船橋、駿河台両キャンパスにて3回の講演会を実施し、述べ3専攻4学科から、教員・学生が参加した。

写真は、船橋先端材料科学センターにて高密度記録媒体のナノ加工実験を行なっている様子。

共催：理工学研究所研究プロジェクト

量子・光・ナノテクノロジー複合領域の教育研究

電子情報工学科専任講師　塚本　新

本特別セッションは、平成19年度第51回日本大学理工学部学術講演会における特別セッションとして12月1日土曜日、駿河台校舎CSTホールにて開催された。理工学研究所研究プロジェクト「量子・光・ナノテクノロジー複合領域の教育研究」（代表：藤川和男教授）との共催により、理学/工学分野から3名の招待講演と、本学より2名の博士後期課程学生、1名の博士前期課程学生が参加し行なわれ、極めて優れた講演と議論がなされた。招待講演者のJames B.Cole准教授からは、本セッションが学内会議とは思えない質の高さであり、また本学において大規模な講演会を実施、学生が参加していることに感銘を受け、筑波大学においても是非このような活動を進めたいとの言葉を頂いている。以下に各講演概要を紹介する。

The High Accuracy Finite Difference Time Domain Algorithm and Applications to Computational Photonics

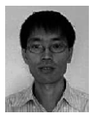
James B.Cole　准教授（筑波大・電子情報工学系）

波長より細かい特徴を持つ構造（例えば、photonic crystal）を用い現実的デバイスを設計するため、Maxwell方程式を解く必要があるが、高対称性・無限周期構造を除き解析解は無いため、数値計算が必要となる。FDTD（時間領域差分法）は効果的だが、細かい数値メッシュでないと精度が低い。講演では、単一周波数光源の場合について荒いメッシュ上でも精度が高い、新FDTD法について紹介した。

Quantitative Analysis of Plasma Resonant Light Scattering from Metallic Nanostructures

田丸博晴　助教（東大・先端科学技術研究センター／科学技術 振興機構・PREST）

金属ナノ構造体からのプラズマ共鳴光散乱を定量的に解析するため、様々な形状のナノ構造体からの散乱スペクトルを測定した。SEM画像から得られたナノ構造体のパラメータを用いて、時間領域差分法に基づく光散乱スペクトルの計算を行い、実測スペクトルを良く再現できることが示された。この方法を用いて、様々な形状およびサイズのナノ構造体について光散乱スペクトルの計算を行い、得られた結果を用いて、観測スペクトルの長波長シフトのサイズ効果を説明し、任意の形状のナノ構造体に適応することができる単純な現象モデルの提案を行った。



Next Generation Information Innovation — from classical information to quantum information

Yun Zhang　学振研究員（学習院大・理・物理／科学技術振興機構・CREST）

従来型通信技術における情報の取り扱いが、量子力学の導入によりどのように変わるのか解説した後、量子物理学の基本原理を直接的な形で通信技術に応用するものとして、スクイーズド光、量子暗号通信について説明した。前者は、量子力学的なゆらぎに起因する雑音を、ゆらぎ自体を人為的に抑圧したスクイーズド光を用い打破する、後者は、量子もつれ状態を形成・利用することで、完全秘匿な通信ができるというものである。原理解説、最新研究成果を説明した後、量子計算、量子テレポテーション等関連分野における最新の研究を紹介した。

Optical Transmission Through One-Dimensional Subwavelength Slit arrays

森茂彦・長谷川啓佑（日大理工・院・量子）・高橋佑太（日大理工・研究生・量科研）・瀬川敏也（日大理工・学部・物理）・井上修一郎（日大理工・教員・量科研）

金薄膜にナノサイズのスリット構造体を作製し、スリットの数・幅・周期を変化させたときの光透過率特性を調べた。スリットの透過スペクトルは、入射偏光方向に依存すること、スリット数・幅・周期を変えることで制御が可能なことが分かった。これらの結果は、表面プラズモンが影響していると考えられる。また、本研究は、固体の量子情報処理デバイスの基礎研究、ナノサイズの光学素子への応用等に繋がることが期待される。

Numerical Analysis of Near-Field Optical Probe with a Hemi-Teardrop-Shaped Object

山口隆志（日大理工・院・電気）・山崎恒樹・日向隆（日大理工・教員・電気）

Maxwell方程式にLorentz-Drudeモデルを併用することで電子集団の運動を組み込む手法を提案した。これにより、金属の光学的性質をFinite-Difference Time-Domain法により精度良く扱うことが可能となる。高効率近接場光発生素子として半しずく形金属を提案し、素子寸法や尖端部の角度が近接場光のエネルギー強度に与える影響を検討した結果について述べた。

Research on Writing Head for Thermally Assisted Magnetic Recording

森信幸・工藤慧・佐野慶文・岡山健一・谷川秀幸（日大理工・院・電子）・金周映（豊橋技科大・電気電子工学系）・芦澤好人・塚本新・中川活二・伊藤彰義（日大理工・教員・子情）

記録密度1 Tbit/inch以上を実現するための、熱アシスト磁気記録では光の回折限界以下へ集光を行う近接場光が必須であり、かつ高い磁気異方性を有する媒体が求められる。本研究ではFDTD法による近接場光解析と静的記録実験により局所領域への集光性を確認した。更にFeCuP微粒子媒体を作製し、熱磁気記録を行い高密度記録媒体として用いることが可能であることを示した。

英語特別セッションを企画してみて

航空宇宙工学科教授　嶋田有三

日本人学生の英語によるコミュニケーション能力の向上が重要視される時代になっておりますが、理工学研究科の現状はどうでしょうか？一部の熱心な研究室の院生のみが国際会議発表の経験を有するという状況であり、研究科としての組織的な取り組みにはなっていません。そこで、各研究室の院生や助手が英語発表を手軽にできる機会をと考え、学術講演会の特別セッションとして英語セッションを設けることを提案しました。

初回ということもあり、これまでも院生の国際会議発表に理解のある研究室を中心に声をかけました。心配された質疑応答も皆何とか乗り切り、期待以上の質の良さに気をよくしております。委員長からも「この取り組みが広がり、どの分野でも日本語と英語の両セッションが併設される状態になればいいですね」とのお言葉をいただいております。

さらに欲を言えば、英語セッションの発表と修論要旨の英語化、英語による専門科目の設置を研究科として義務づけることができれば、「エンジニアとしての英語コミュニケーション能力の育成」を大学院教育の目標の一つに掲げることができます。「明確な目標を建て、実行し、達成度をチェックし、改善する」というPDCAサイクルにも容易に適合するため、「大学院教育改革支援プログラム」応募の際の一策にならないでしょうか？

以下は参加学生の声です。院生達への良い刺激になったことがわかります。：初めての英語発表で、しかも一番手ということもあり緊張しました。しかし、Opening Addressにて嶋田教授が、「学生にとって英語で発表することは非常に難しいことです。成長の糧になるようなチャンスにしましょう」といった話をしてくださったこともあり、失敗への不安より自信にしたいと思えました。ところどころ詰まりましたが、練習しただけの発表はできました。また、他の学生の素晴らしい発表と質疑応答にも感化され、更なる努力の必要も感じました。（大淵）／日本国内ではなかなか英語発表の機会がないので、今回の特別セッションは貴重な経験になりました。予期せぬ質問に、頭が真っ白になってしまいました。なんとか単語を並べて理解してもらいましたが、どのような質問にもその場で答えられる語彙力と度胸が必要だと強く感じました。（山本）／英語での資料作り、発表を通して、自分の思っていることを伝えることの難しさと楽しさを学びました。（山崎）／英語で質問を行ったり、質問に答えたりする力が必要だ、と感じました。（有田）／日本語で発表するときとはまた違った緊張感を体験することができ、これからグローバルな活躍を目指している人の第一歩になる素晴らしい機会だと感じました。（森本）／英語での発表は三回目でしたが、今回は学部内ということで、これまでより安心感のある場で発表させて頂きました。海外での初めての発表のときは、不安だらけでしたので、今回のように自信を付ける機会が事前にあれば良かったと思います。（稲葉）／この経験によって得られたものは、“自分に対する自信”だと思います。語学能力は関係ありません。英語で口頭発表するために必要なものはやる気と勇気です。（赤井）／体験して感じたのは咄嗟に質問内容に対応できる言葉が思い浮かばなかったことです。事前の勉強不足や専門単語を暗記するといった普段からの努力が足りなかったと感じました。良い経験と思い頑張って生きたい。（二ノ宮）

第３０回理工学部学会・協会賞受賞者一覧（平成１９年度）

（所属・資格は平成 19年 9月 1日現在のもの）

●研究業績部門

志水　茂（株）都市活力研究所取締役　平成 19年 3月後（東京海洋大）
受賞名　論文賞
表彰内容　広域旅客流動に伴う所要時間・エネルギー消費量および二酸化炭素排出量を用いた高速道路の重点整備方策に関する研究
授与機関名　日本計画行政学会
受賞年月日　平成 19年 9月 15日

髙橋正行　日本大学理工学部専任講師　平成 17年 3月後（土木）
受賞名　第 6回年次学術講演会優秀講演者賞
表彰内容　階段状水路におけるNappe flowのエネルギー評価方法
授与機関名　（社）土木学会
受賞年月日　平成 18年 12月 20日

仲村成貴　日本大学理工学部助手　平成 9年 3月前（土木）
受賞名　第 6回年次学術講演会優秀講演者賞
表彰内容　未知の地動入力に対する構造物の動特性推定
授与機関名　（社）土木学会
受賞年月日　平成 18年 12月 20日

野村卓史　日本大学理工学部教授　昭和 54年 3月前（東大）
受賞名　平成 18年度日本風工学会 学会賞（論文賞）
表彰内容　気象要因を考慮した音の伝播の数値解析法に関する研究
授与機関名　（社）日本風工学会
受賞年月日　平成 19年 5月 31日

吉田征史　日本大学理工学部助手　平成 18年 3月後（土木）
受賞名　第 42回環境工学研究フォーラム奨励賞
表彰内容　亜硝酸による好気的リン摂取阻害を緩和する脱リン細菌の脱窒能力
授与機関名　（社）土木学会（環境工学委員会）
受賞年月日　平成 18年 1月 17日

髙田邦道　日本大学理工学部教授　昭和 43年 3月前（建設）
受賞名　日本物流学会賞
表彰内容　著書「都市の物流マネジメント」
授与機関名　（社）日本物流学会
受賞年月日　平成 19年 9月 7日

田中重光　株式会社東急設計コンサルタント基幹職　平成 9年 3月後（交土）
受賞名　第 23回 大半正芳記念賞　特別賞
表彰内容　著書「近代・中国の都市と建築」
授与機関名　（財）大半正芳記念財団
受賞年月日　平成 19年 6月 12日

安井一彦　日本大学理工学部准教授　昭和 56年 3月後（交土）

小貝真史　（株）日本空港コンサルタンツ　平成 18年 3月前（交通）
受賞名　研究奨励賞・安全の泉賞
表彰内容　クリアランス時間の適正化に伴う車両挙動の変化に関する研究
授与機関名　（社）交通工学研究会
受賞年月日　平成 18年 1月 24日

安井一彦　日本大学理工学部准教授　昭和 56年 3月後（交土）
受賞名　研究奨励賞
表彰内容　歩行者感応制御の高度化実証実験
授与機関名　（社）交通工学研究会
受賞年月日　平成 18年 1月 24日

稲毛大輔　日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博前 2年　平成 18年 3月学（建築）
受賞名　AES Japan Conference Fukuoka 2006 STUDENT PAPER AWARD 第 1回優秀賞
表彰内容　複数のカーディオイドマイクを組み合わせた仮想音源分布の測定手法
授与機関名　AES日本支部
受賞年月日　平成 19年 7月 24日

小川広次　株式会社小川広次建築設計事務所代表取締役　昭和 57年 3月学（建築）
受賞名　JIA新人賞
表彰内容　作品　阿佐谷南の家
授与機関名　（社）日本建築家協会
受賞年月日　平成 19年 5月 31日

加瀬靖子　千葉市役所　平成 19年 3月前（不動産）
受賞名　2006年土木学会優秀講演賞
表彰内容　景観法に基づく景観計画の策定プロセスに関する研究
授与機関名　（社）土木学会
受賞年月日　平成 19年 1月 18日

加瀬靖子　千葉市役所　平成 19年 3月前（不動産）
受賞名　2007年日本建築学会優秀修士論文賞
表彰内容　景観法に基づく景観計画の策定プロセスと運用実態に関する研究
授与機関名　（社）日本建築学会
受賞年月日　平成 19年 8月 29日

加藤未佳　日本大学理工学部ポストドクター　平成 16年 3月後（建築）
受賞名　平成 19年度照明学会研究奨励賞
表彰内容　“Impression of Brightness of a Space”Judged by Information from the Entire Space
授与機関名　（社）照明学会
受賞年月日　平成 19年 8月 23日

河村　準　株式会社トータル・インフォメーション・サービス　平成 19年 3月前（建築）
受賞名　第 29回コンクリート工学講演会年次論文奨励賞
表彰内容　ファイバーモデルによる偏心RC造3層骨組の動的ねじれ挙動に関する解析的検討
授与機関名　（社）日本コンクリート工学協会
受賞年月日　平成 19年 7月 13日

黒川泰孝　メジロスタジオ一級建築士事務所　平成 14年 3月前（建築）
受賞名　第 2回サステナブル住宅賞　国土交通大臣賞
表彰内容　建築作品　アシタノイエ
授与機関名　（財）建築環境・省エネルギー機構
受賞年月日　平成 19年 3月 24日

黒川泰孝　メジロスタジオ一級建築士事務所　平成 14年 3月前（建築）
受賞名　2007年日本建築学会　作品選奨
表彰内容　建築作品　アシタノイエ
授与機関名　（社）日本建築学会
受賞年月日　平成 19年 5月 30日

斉藤公男　日本大学理工学部教授　昭和 38年 3月後（建築）

岡田　章　日本大学理工学部教授　昭和 54年 3月後（建築）

宮里直也　日本大学理工学部非常勤講師　平成 13年 3月後（建築）
受賞名　2007年日本建築学会教育賞（教育貢献）
表彰内容　創造性を育む体験的建築教育―空間と構造を結ぶものづくり教育の試み―
授与機関名　（社）日本建築学会
受賞年月日　平成 19年 5月 30日

高宮眞介　株式会社計画・設計工房代表　昭和 37年 3月学（建築）
受賞名　最優秀賞
表彰内容　山形大学工学部創立 100周年記念会館に係る公募型プロポーザル
授与機関名　（社）米沢工業会
受賞年月日　平成 18年 12月 13日

高宮眞介　株式会社計画・設計工房代表　昭和 37年 3月学（建築）
受賞名　最優秀賞
表彰内容　村山市総合文化複合施設基本設計業務公募型プロポーザル
授与機関名　村山市
受賞年月日　平成 19年 3月 8日

髙田清太郎　株式会社髙田建築設計事務所代表取締役　昭和 49年 3月学（建築）
受賞名　最優秀賞
表彰内容　作品名　ファサモンド
授与機関名　（社）新潟県建築設計事務所協会
受賞年月日　平成 19年 5月 16日

棚部裕貴　有限会社ヒロ・デザインスタジオ　平成 11年 3月前（建築）
受賞名　第 33回東京建築賞　最優秀賞（一般部門一類）
表彰内容　建築作品　南長野歯科医院・住宅
授与機関名　（社）東京建築士事務所協会
受賞年月日　平成 19年 5月 28日

中田善久　日本大学理工学部准教授　平成 2年 3月前（建築）
受賞名　2007年日本建築仕上学会学会賞　論文奨励賞
表彰内容　施工方法の違いがコンクリート表面の仕上がり性状に及ぼす影響に関する研究
授与機関名　日本建築仕上学会
受賞年月日　平成 19年 5月 16日

星　和磨　日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博後 2年　平成 13年 3月前（建築）
受賞名　AES Japan Conference Fukuoka 2006 STUDENT PAPER AWARD 第 1回最優秀賞
表彰内容　音に包まれた感じを考慮したマルチチャンネル再生のためのスピーカー配置
授与機関名　AES日本支部
受賞年月日　平成 19年 7月 24日

堀尾貞治　日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博前 2年　平成 17年 9月学（建築）
受賞名　AES Tokyo 2007 学生・若手エンジニアのためのSOUND AWARD 第 3回奨励賞
表彰内容　作品名　ココロノコエ―時空を越えて―
授与機関名　AES日本支部
受賞年月日　平成 19年 7月 24日

宮下正人　株式会社三菱地所設計　平成 19年 3月前（建築）
受賞名　2006年度関東支部　若手優秀研究報告賞
表彰内容　レンズ型二重空気膜構造の強風時の構造挙動について―風荷重の評価と動的応答解析手法の提案―
授与機関名　（社）日本建築学会　関東支部
受賞年月日　平成 19年 3月 20日

山崖徹朗　昭和 46年 3月学（建築）
受賞名　日・仏・中　第 7回現代美術世界展日仏賞
表彰内容　中国天津美術学院で開催された作品展での優秀賞
授与機関名　日本欧州美術倶楽部
受賞年月日　平成 19年 3月 24日

依田彰彦　足利工業大学名誉教授　昭和 35年 3月学（建築）
受賞名　無機マテリアル学会　学術賞
表彰内容　二酸化炭素削減に寄与する高炉スラグ微粉末のコンクリートへの高度利用
授与機関名　無機マテリアル学会
受賞年月日　平成 19年 6月 7日

畔柳昭雄　日本大学理工学部教授　昭和 56年 3月後（建築）
受賞名　2007年日本建築学会賞
表彰内容　人間と水環境系との相互の関係性に関する一連の研究
授与機関名　（社）日本建築学会
受賞年月日　平成 19年 5月 30日

島田誠二　山田建設株式会社　平成 19年 3月学（海建）
受賞名　2007年日本建築学会優秀卒業論文賞
表彰内容　鉄筋コンクリート造T形柱梁接合部の動的載荷時における弾塑性挙動に関する解析的研究
授与機関名　（社）日本建築学会
受賞年月日　平成 19年 8月 29日

荒木秀一郎　平田機工株式会社　平成 19年 3月前（機械）
受賞名　2007年度精密工学会春季大会学術講演会　ベストプレゼンテーション賞
表彰内容　微細軸加工用工具切刃形状の設計
授与機関名　（社）精密工学会
受賞年月日　平成 19年 3月 23日

飯島晃良　日本大学理工学部助手　平成 16年 3月前（機械）

庄司秀夫　日本大学理工学部教授　昭和 42年 3月後（機械）

吉田幸司　日本大学理工学部教授　昭和 59年 3月前（機械）

渡邊高志　株式会社日立製作所　平成 19年 3月前（機械）
受賞名　SETC2006 Special Recognition Award
表彰内容　A Study of HCCI Combustion Using a Two-Stroke Gasoline Engine with a High Compression Ratio
授与機関名　SAE International（米国自動車技術会）、（社）自動車技術会
受賞年月日　平成 18年 1月 16日

岡田正雄　（株）太洋取締役　昭和 31年 3月学（機械）
受賞名　平成 19年度日本塑性加工学会賞優秀賞　会田技術奨励賞
表彰内容　高強度薄肉鋼管の新曲げ加工法開発とアーム部品への適用
授与機関名　（社）日本塑性加工学会
受賞年月日　平成 19年 5月 25日

岡村誠士　日本大学大学院理工学研究科機械工学専攻博前 2年　平成 18年 3月学（機械）
受賞名　日本機械学会フェロー賞（若手優秀講演）
表彰内容　ストロークHCCI機関にEGRとオクタン価が及ぼす影響
授与機関名　（社）日本機械学会
受賞年月日　平成 18年 10月 6日

栗林祐也　東日本旅客鉄道株式会社　平成 19年 3月学（機械）
受賞名　日本機械学会第 44回学生員卒業研究発表講演会　ベストプレゼンテーション賞
表彰内容　工具切れ刃形状による切削抵抗の制御
授与機関名　（社）日本機械学会 関東支部
受賞年月日　平成 19年 3月 16日

栗林祐也　東日本旅客鉄道株式会社　平成 19年 3月学（機械）

李　和樹　日本大学理工学部教授　昭和 58年 3月後（都立大）

山田高三　日本大学理工学部専任講師　平成 10年 3月修（千葉大）
受賞名　第 28次工作機械技術振興賞　奨励賞
表彰内容　工具切れ刃形状による切削抵抗の制御
授与機関名　（財）工作機械技術振興財団
受賞年月日　平成 19年 6月 18日

小林正明　マツダ株式会社 平成 19年 3月前（機械）
受賞名　日本機械学会第 13期関東支部総会講演会　優秀講演賞
表彰内容　砥石作業面形状の 3次元形状測定装置の試作
授与機関名　（社）日本機械学会　関東支部
受賞年月日　平成 19年 3月 16日

背戸一登　（有）背戸振動制御研究所所長　昭和 46年 3月後（都立大）
受賞名　計測自動制御学会学会賞　著述賞
表彰内容　著書「構造物の振動制御（産業制御シリーズ⑩）」（2000年コロナ社）
授与機関名　（社）計測自動制御学会
受賞年月日　平成 19年 9月 19日

田中健嗣　オカモト株式会社人事部マネージャー

武居昌宏　日本大学理工学部准教授　平成 7年 3月後（早大）
受賞名　技術賞
表彰内容　薄膜風袋空気搬送装置の開発
授与機関名　日本ウォータージェット学会
受賞年月日　平成 19年 4月 20日

堀内伸一郎　日本大学理工学部教授　昭和 59年 3月後（航宇）

岡田一行　株式会社本田技術研究所　平成 8年 3月前（機械）

納富信也　株式会社本田技術研究所主任研究員　平成 5年 3月前（航宇）
受賞名　The Best Paper Award
表彰内容　Analyses of Braking Stability Using Constrained Bifurcation and Continuation Methods
授与機関名　International Association for Vehicle System Dynamics
受賞年月日　平成 19年 8月 17日

籾山冨士雄　日野自動車株式会社シャシ機構設計部R&Dアドバイザー　昭和 42年 3月学（機械）
受賞名　European Traffic Safety Award for Commercial Vehicles 2006
表彰内容　Outstanding Contributions to Traffic Safety
授与機関名　EUV（欧州事故調査解析協会）、DVU（ドイツ交通安全評議会）、International Automotive Industry
受賞年月日　平成 18年 10月 12日

両方康朗　株式会社 HI平成 19年 3月前（機械）
受賞名　日本機械学会フェロー賞
表彰内容　2リンク柔軟ロボットアームの姿勢変化を考慮した運動と振動のHロバストサーボ制御
授与機関名　（社）日本機械学会
受賞年月日　平成 19年 3月 26日

宗像　哲　日本大学大学院理工学研究科精密機械工学専攻博前 2年　平成 18年 3月学（精機）
受賞名　第 150回全国講演大会　学生優秀講演賞
表彰内容　レーザー溶接によるCAC403銅合金鋳物／SUS430ステンレス鋼溶接継手の強度特性
授与機関名　（社）日本鋳造工学会
受賞年月日　平成 19年 6月 7日

出井　裕　日本大学理工学部教授　昭和 55年 3月前（機械）

小牧修平　株式会社 HI　平成 19年 3月前（機械）

岡野道治　日本大学理工学部教授　昭和 50年 3月後（機械）
受賞名　日本粉末冶金工業会　第 4回 PM研究促進展奨励賞
表彰内容　放電プラズマ焼結法による低コストウィスカ強化チタンの創製
授与機関名　日本粉末冶金工業会
受賞年月日　平成 18年 12月 5日

尾崎亮介　日本大学理工学部助手　平成 18年 3月前（電気）
受賞名　学生優秀発表賞
表彰内容　エアホール型誘電体導波路の伝搬特性［EMT-06-40］、エアホール型誘電体導波路の伝搬特性（その 2）［EMT-06-99］
授与機関名　（社）電子情報通信学会　電磁界理論研究専門委員会
受賞年月日　平成 19年 5月 26日

関　雅洋　日本大学大学院理工学研究科電気工学専攻博前 2年　平成 18年 3月学（電気）
受賞名　電気設備学会　全国大会発表奨励賞
表彰内容　円弧キャンバー翼垂直軸形風車の翼取付角が風車特性に及ぼす効果
授与機関名　（社）電気設備学会
受賞年月日　平成 18年 1月 14日

髙橋宗人　日本大学大学院理工学研究科電気工学専攻博前 2年　平成 18年 3月学（電気）
受賞名　優秀研究発表賞
表彰内容　彩色高輝度面光源のまぶしさに関する研究
授与機関名　（社）照明学会　東京支部
受賞年月日　平成 18年 12月 8日

山口隆志　日本大学大学院理工学研究科電気工学専攻博後 3年　平成 17年 3月前（電気）
受賞名　学生優秀発表賞
表彰内容　金属球体による近接場光の FDTD解析［EMT-06-110］
授与機関名　（社）日本機械学会　電磁界理論研究専門委員会
受賞年月日　平成 19年 3月 26日

安部雄貴　インクリメントP（株）開発本部第二開発部第三開発G　平成 18年 3月前（情報）
受賞名　平成 18年電気学会全国大会　優秀論文発表賞
表彰内容　遅延回復と消費電力低減のための列車出発時刻の検討
授与機関名　（社）電気学会
受賞年月日　平成 19年 3月 16日

大渕一央　（株）富士通研究所主任研究員　平成元年 3月前（電子）
受賞名　発明協会栃木県支部長賞
表彰内容　移動体通信基地局及び移動局
授与機関名　（社）発明協会
受賞年月日　平成 18年 11月 21日

岡部　玄　コクヨ株式会社　平成 19年 3月前（電子）

山口　健　日本大学理工学部助手　平成 18年 3月前（電子）

吉川　浩　日本大学理工学部教授　昭和 60年 3月後（電気）
受賞名　3次元画像コンファレンス優秀論文賞
表彰内容　全方向視差のインタラクティブホログラフィックテレビジョンのフルカラー表示
授与機関名　3次元画像コンファレンス 2006実行委員会
受賞年月日　平成 19年 7月 12日

鈴木一朗　日本大学理工学部電子情報工学科 4年
受賞名　優秀論文発表賞
表彰内容　ドライバ支援を目的としたテールランプおよびブレーキランプの抽出―テールランプを用いた前方車両の抽出―
授与機関名　（社）電気学会　東京支部千葉支所
受賞年月日　平成 18年 12月 21日

遠山岳史　日本大学理工学部専任講師　平成 11年 3月後（工化）
受賞名　第 16回日本無機リン化学会　奨励賞
表彰内容　非晶質リン酸カルシウムを原料とするカルシウム塩機能材料の創製
授与機関名　日本無機リン化学会
受賞年月日　平成 19年 6月 9日

秋久俊博　日本大学理工学部教授　昭和 48年 3月後（工化）

浮谷基彦　日本大学理工学部助手　平成 11年 3月後（工化）
受賞名　Most Cited Paper Award
表彰内容　Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry誌掲載論文「Triterpene Acids from the Leaves of Perilla frutescens and Their Anti-inflammatory and Antitumor-promoting Effects（Vol.68 pp.85-90（2004））は本誌 68巻、69巻掲載論文中で引用回数最多
授与機関名　（社）日本農芸化学会
受賞年月日　平成 19年 3月 24日

磯崎昭徳　日本大学総合科学研究所教授　昭和 51年 3月後（東工大）
受賞名　日本空気清浄協会賞　論文賞
表彰内容　ホルムアルデヒドの高感度パッシブサンプラーの開発
授与機関名　（社）日本空気清浄協会
受賞年月日　平成 19年 5月 30日

大巾真弥　日本大学大学院理工学研究科物質応用化学専攻博前 2年　平成 17年 3月学（応化）
受賞名　ポスター賞
表彰内容　透明PMMA/SiO2ハイブリッドの創製：ナノ粒子の分散性に与える分子量の影響
授与機関名　（社）高分子学会　グリーンケミストリー研究会
受賞年月日　平成 19年 6月 8日

北谷戸　尚　日本大学大学院理工学研究科物質応用化学専攻博前 2年　平成 17年 3月学（応化）
受賞名　ポスター賞
表彰内容　片末端反応性オリゴスチレンを用いた両親媒性共重合体の合成とその物性
授与機関名　（社）高分子学会　グリーンケミストリー研究会
受賞年月日　平成 18年 12月 1日

石川光一　日本大学理工学部教授　昭和 51年 3月前（哲学）
受賞名　第 43回日本翻訳出版文化賞
表彰内容　著書「ジャン・メリエの遺言書」共訳翻訳・出版
授与機関名　NPO法人　日本翻訳家協会
受賞年月日　平成 18年 10月 1日

横村隆子　（有）横村隆子 YHT環境設計代表取締役　昭和 52年 3月学（建築）

小石川真弓　昭和 53年 3月博学（建築）
受賞名　最優良賞
表彰内容　鎌倉市営盤住宅設計競技「良質な都市のストックとしての住宅」
授与機関名　（社）日本建築士会連合会
受賞年月日　平成 19年 6月 16日

●功労部門

川嶋　実　株式会社川嶋建設代表取締役社長　昭和 47年 3月学（土木）
受賞名　平成 18年度建築事業関係功労者賞
表彰内容　多年にわたる建設事業の振興
授与機関名　国土交通省
受賞年月日　平成 19年 7月 10日

田中和博　日本大学理工学部教授　昭和 42年 3月後（東大）
受賞名　感謝状
表彰内容　平成 11年 5月から 19年 5月まで 8年間にわたり東京都環境影響評価審議会委員として、水質汚濁、土壌汚染の分野で環境行政の推進に多大な貢献をした
授与機関名　東京都
受賞年月日　平成 19年 5月 30日

田中和博　日本大学理工学部教授　昭和 42年 3月後（東大）
受賞名　功労賞
表彰内容　多年にわたり下水道に関する多くの要職にあってその進歩発展に貢献した
授与機関名　（社）日本下水道協会
受賞年月日　平成 19年 6月 29日

松島　眸　日本大学理工学部教授　昭和 51年 1月後（イリノイ大）
受賞名　功労賞
表彰内容　学会の発展に尽力した功績
授与機関名　（社）日本水環境学会
受賞年月日　平成 19年 6月 22日

森元峯夫　株式会社エス・イー代表取締役社長　昭和 33年 3月学（土木）
受賞名　コマンドホール勲章（フランス政府国家功労賞）
表彰内容　40年余にわたる日本とフランスとの土木技術・文化交流の実績
授与機関名　フランス政府
受賞年月日　平成 19年 5月 21日

武居昌宏　日本大学理工学部准教授　平成 7年 3月後（早大）
受賞名　The JOV Award
表彰内容　Appreciation and Recognition of Editorial Contributions The Journal of Visualization
授与機関名　（社）可視化情報学会
受賞年月日　平成 19年 7月 24日

吉田幸司　日本大学理工学部教授　昭和 59年 3月前（機械）
受賞名　創立 60周年記念功労賞
表彰内容　自動車技術会の発展に対する多大な貢献
授与機関名　（社）自動車技術会
受賞年月日　平成 19年 5月 24日

末澤芳文　昭和 19年 6月後（専門部工科）
受賞名　平成 18年度界面接合研究功労賞
表彰内容　永年の溶接学に関する功績
授与機関名　（社）溶接学会
受賞年月日　平成 19年 5月 18日

小嶋芳行　日本大学理工学部准教授　昭和 63年 3月前（工化）
受賞名　特別功労賞
表彰内容　石膏ボード業界の育成と発展に寄与
授与機関名　（社）石膏ボード工業界
受賞年月日　平成 19年 6月 15日

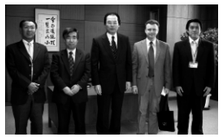
中森秀樹　ナノテック株式会社代表取締役社長　平成 14年 3月後（物理）
受賞名　発明功労賞
表彰内容　瞬間着火型ホローカソードガンの発明
授与機関名　（財）日本発明振興協会・日刊工業新聞社
受賞年月日　平成 19年 2月 28日

中森秀樹　ナノテック株式会社代表取締役社長　平成 14年 3月後（物理）
受賞名　東久邇宮記念賞
表彰内容　コーティング装置の知的財産の振興と発明に関する功績
授与機関名　東久邇宮記念賞
受賞年月日　平成 19年 7月 24日

● TOPICS & NEWS ●

■理工学部招へい研究員の学部長表敬訪問

平成１９年度の理工学部招へい研究員であるオランダ・ラダバウト大学ナイメーヘン校のアンドレイ・キリリューク博士が本学部電子情報工学科の伊藤教授並びに塚本専任講師とともに１１月８日（木）午後２時３０分から越智学部長を表敬訪問した。同博士は、１０月２２日（月）から１１月１０日（土）まで理工学部電子情報工学科の教員との研究打合せを行うため来日したもの。



■大学院・学部特別講演会

スウェーデン・カールスタッド大学科学・数理物理工学科のユリー・Ｖ・セスタパーロフ教授による特別講演会（主催：大学院理工学研究科電気工学専攻、後援：理工学部駿博会）が１１月１３日（火）午後４時４０分から駿河台校舎１号館１２２会議室において多くの教員・学生の出席のもと行われた。
題目は、「開放型導波路の電磁界解析：電磁界開放領域の非自己随伴境界値問題」。

■第３０回理工学部学術賞等表彰式

平成１９年度第３０回理工学部学術賞等表彰式が、１１月９日（金）午後５時から駿河台校舎１号館ＣＳＴホールにて、小嶋総長・理事長、高田副理事長並びに馬場理工学部校友会会長代理を来賓としてお迎えし、盛大に行われた。本年は、学術賞受賞者（土木工学科齋藤利晃准教授、電子情報工学科塚本　新専任講師）、教育賞受賞者（一般教育中川　浩准教授、郭海燕専任講師）の表彰に続き、学会・協会賞（研究業績部門５９件、功労部門１２件）、学位取得者４０名が表彰された。表彰後は、学術賞、教育賞それぞれの先生による記念講演が行われ、午後７時から同校舎１号館２階で祝賀会が行われた。

■産学公東京技術交流会への参加

１１月２５日（木）・２６日（金）の両日、東京ビックサイトにおいて東京都が主催する産学公東京技術交流会が開催された。この交流会は、大学等と技術開発型企業との共同研究開発のきっかけ作りということが目的で毎年開催されているもので、今年度は東京都が毎年実施している産業交流展２００７との同時開催となった。

教育機関からの参加は、国立・私立を含めて１８大学で、本学からは理工学部と本部ＮＵＢＩＣが参加した。

■千葉県インキュベーション・ネットワーク・フォーラムへの参加

11月22日（木）に、千葉県柏市にある東葛テクノプラザにおいて、財団法人千葉県産業振興センター主催の千葉県インキュベーション・ネットワーク・フォーラムが開催された。このフォーラムは、東葛テクノプラザを含む県内のビジネスインキュベーション施設と関連企業・機関とが一同に会し、産学連携のきっかけ作りをするということが目的で開催されたものである。

教育機関からの参加は、本学を含めて国立・私立を合わせて9大学となっており、本学からは東葛テクノプラザ内に大学研究交流オフィスをもっている理工学部と生産工学部が参加した。

■西安理工大学交換教員の学部長表敬訪問

平成19年度の西安理工大学からの交換教員として来日した材料工学科の范志康教授・同大学副校長（受入れ：航空宇宙工学科出井　裕教授）及び岩土工学科の范留明副教授（受入れ：土木工学科塩尻弘雄教授）の両名が土木工学科の塩尻教授とともに11月29日（木）午後3時から越智学部長を表敬訪問した。両名は、11月19日（月）から12月11日（火）まで滞在し、それぞれの受入れ教員のもとで研究活動を行う。

■第51回理工学部学術講演会

平成19年度第51回理工学部学術講演会が、12月1日（土）に駿河台校舎1号館にて行われた。当日は、午前8時30分からCSTホールにおいてオープニング・セレモニーが行われ、午前9時から各会場において口頭発表、ポスター発表が活発に行われた。本年の投稿件数は、口頭発表411件、ポスター発表320件の合計731件。また特別セッションとしては、Session1理工学部現代GP、理工学部特色GP、短期大学部特色GP、Session2“Physics and Engineering on Quantum ,Photonic and Nano Technologies”、Session3“Young Researchers Session on Aerospace Technology”が行われた。本年度の来場者数は、教員283名、学生1649名、学外者69名の合わせて2001名となった。

学術講演会終了後、CSTホールにて盛大に懇親会が行われた。

■第51回理工学部学術講演会　優秀発表賞表彰式

平成19年度第51回理工学部学術講演会において優秀な発表をした学生に対する優秀発表賞の表彰式が、12月13日（木）午後4時30分からCSTホールにおいて行われた。今年度の受賞者は33名で、表彰状並びに副賞としてリサーチ・ラボノートが全員に授与された。

駿博会ニュース

駿博会（しゅんぱくかい）の第7回目のご案内です。本会の正式名称は「日本大学理工学部駿博会」となっており、日本大学大学院理工学研究科及び理工学部の研究活動の進展と大学院学生の育成に寄与し、もって広く社会に貢献することを目的として昭和57年（1982年）に設立されました。会の組織は博士の学位を有する理工学部教職員ならびに校友で構成されております。また、この会が発足した2年後の昭和59年（1984年）には、本学大学院理工学研究科では、他大学に先駆けてわが国初の社会人大学院制度を設けております。このような会や大学院制度の設立は、当時の先生や職員の方々が、昨今の科学技術の加速度的な進展とそれに伴う国際競争の激化に対処するため、高度な教育を受けた研究者、高級技術者が求められていくことを予想して行ったすばらしい取組みであったと改めて敬意を表したいと思います。

しかし、その当時から20年以上を経過したわが国の現状をみると、文系・理系を含めた大学院生数は、欧米に比べて未だに低く、アメリカの約15%、イギリス・フランスの約30%にすぎないと云われております。今後、日本の社会は高度な知識社会に向けて大学院教育が益々必要になることは必然的であると考えられます。

そのような社会状況の中、会則を改訂し本年度より新たな出発をした駿博会では、設立25周年記念行事として、国内外で活躍されている本学の若手3人の先生方による「理工学の未来」と題した記念講演を来る平成20年5月31日（土）の14時30分から17時にかけて、駿河台校舎1号館CSTホールにて開催する予定にしております。また、記念行事の一環として駿博会ロゴマークの募集を行っていく予定でおります。

今後とも駿博会の活動趣旨にご賛同いただける多くの方のご入会をお待ちしております。入会手続き、学内で開催する講演会への支援依頼等については研究事務課までお問合わせください。

（駿博会総務委員　土木工学科　梅村靖弘）

編集後記

2008年の新年を迎え、本年最初の理工研Newsを発行します。昨年の12月には学術講演会が盛大に開催されました。多くの研究発表の他に、若手研究者へ贈られる学術賞を受賞した先生方の講演や特別セッションの講演が行なわれ、その概要が掲載されています。理工学部の教職員・大学院生は多くの分野で活躍しており、更なる研究成果を期待するとともにその成果が社会の発展に大いに貢献することを願っています。このことが、後々にはOBの活躍に繋がっていきます。本年も、理工研Newsを通して、理工学部の研究成果や様々な出来事を発信して行きたいと考えていますので宜しくお願い致します。

（副編集長〈No.56担当〉海洋建築工学科専任講師　近藤典夫）

理工研News　NO.56　Vol.19　2008/01

発行日：平成20年1月31日　　発行人：伊藤彰義
発　行：理工研News編集委員会　　編集長：青木義男
副編集長：近藤典夫、高橋　聖、根來　均
幹　　事：若槇智也、三宅浩平

日本大学理工学部研究事務課
〒101-8308　東京都千代田区神田駿河台1-8-14
TEL.03-3259-0929　FAX.03-3293-5829
http://www.kenjm.cst.nihon-u.ac.jp/